

論 文 要 旨

論文題目 Henry James on Ethical Questions within the Process of Globalization

(ヘンリー・ジェイムズと倫理—

グローバリゼーションにおける倫理的諸問題の展開)

氏名 松浦 恵美

本論文では、アメリカ人作家 Henry James (1843-1916) のテキストを対象に、19 世紀後半から 20 世紀初頭のグローバルな権力関係が大きく変化した時代、彼のテキストが地政学的条件の変化を受けてどのような新しい倫理的姿勢を示しているかを考察したものである。

ヘンリー・ジェイムズは、アメリカが南北戦争後の産業的経済的發展を経て世界の覇権国へと変貌を遂げ、同時に 19 世紀に繁栄を極めたヨーロッパ、特に大英帝国が衰退の時期を迎える時代に、国籍離脱者としてイギリスで作家活動を行った。ジェイムズのテキストには、19 世紀のヨーロッパを中心とした植民地主義と国民国家体制に基づく世界から、アメリカが覇権を握り、それと同時にグローバルな体制が生まれつつある世界へと変化する過程が反映されている。また、国籍離脱者としてのジェイムズは、恒常的に不安定な状態に身を置くとともに、国家による要請や社会的慣習、規範、階級などに規定されない、比較的自由的な立場を確保した。このような立場から、ジェイムズはアメリカとヨーロッパの邂逅を主題とする、いわゆる国際小説を数多く発表した。その中には、この時代のアメリカとヨーロッパの権力関係の変化と、その中で人々が新しい社会的心理的状况にさらされる様子が描かれている。これらの点に注目すると、ジェイムズのテキストは、国民国家や国境の意義が侵食された今日のグローバルな状況につながる新しい世界秩序が出現しつつある中での、人々の不安定な存在様式と、彼らが下す倫理的決断を描いたと考えられる。

このような理解のもとに、本論文では、ジェイムズのテキストに現れるグローバルな状況の中での倫理的諸問題を考察する。本論文では、グローバリゼーションを、離れた地域間の社会関係の結び付きの強化によって、空間およびイデオロギー的統一を生み出す動きであり、それによって人々の行動および意識に根本的な変化が起こるという理解に立って考察を進める。ジェイムズのテキストにおいては、新しい状況に直面した人々の倫理的姿勢および決断が、ジェンダーやセクシュアリティ、結婚、相続といった社会的主題を通して、また民主主義、消費資本主義、アメリカ帝国主義の拡大といった政治的社会的変化を背景として展開される。本論文では、ジェイムズのテキストが示す新しい倫理的姿勢を、各テキストが成立した当時の地政学

的条件と照らし合わせながら、時代順に考察する。

第1章では、1870年代の初期長編小説における女性の表象と男女の非規範的關係を、国家との關係から分析する。南北戦争終結後のアメリカでは、男性と女性のそれぞれに対し厳格なジェンダー役割が割り当てられていた。しかし、ジェイムズは、一見規範的な男女の關係の内に、国家が要請する男性像および女性像とは異なる側面を描いたことが確認できる。この男女の非規範的な側面に注目し、ジェイムズが描いた国家が要請するジェンダーおよび異性愛規範に対する抵抗を分析する。

第2章では、中期の代表作を投資という経済的文脈から分析すると同時に、女性主人公が19世紀の結婚制度にどのような挑戦を挑んだかを考察する。19世紀アメリカにおいては、女性が公的および経済的領域で活動することは想定されていなかった。しかしジェイムズは、女性主人公に経済的資本を与えることで、女性に当時の社会で与えられていなかった自由を付与するとともに、男女の不平等を制度化する当時の結婚制度に対する挑戦を描いたと考えられる。

第3章では、中期の長編小説におけるテロリズムと民主主義について考察する。19世紀後半、ヨーロッパで民主主義が拡大する中、ジェイムズはこの新しい政治体制を解放と破壊の両方をもたらすものとして提示している。また、近代民主主義における女性の排除を前景化し、他者をめぐる民主主義の根本的矛盾を明らかにしている。この章では、アレクシ・ド・トクヴィルとジャック・デリダの民主主義に関する論考を参照し、今日につながる民主主義の問題と可能性を論じる。

第4章では、1890年代の中編小説の分析を通して、19世紀末イギリス社会における物質的条件の変化とその中での倫理について考察する。この時期のジェイムズのテキストは、アメリカヨーロッパにおける消費資本主義の拡大を背景としているが、その中で苦境に立たされる女性主人公の倫理的姿勢を、資本による価値の一元化に抵抗する力として読む。

第5章では、20世紀初頭に書かれたジェイムズ円熟期の長編小説における、グローバリゼーション初期の世界の中での倫理を分析する。この時期のテキストにおける新しい世代のアメリカ人登場人物は、19世紀末の米西戦争以降、軍事的海外拡張政策を展開したアメリカ帝国主義を反映している。そのような地政学的条件を背景として、このテキストの主人公を、変わり続ける現象の認識に基盤を置いた新しい倫理的主体として読む。

第6章では、ジェイムズ最晩年の1914年から15年にかけて書かれた第一次世界大戦についてのエッセイを通して、ジェイムズが示したトランスナショナルな文化の可能性を考察する。大戦中は各国でナショナリズムが燃え上がり、文化を国家に結びつける言説が広く流通した。それに対し、ジェイムズは異なる地域間で共有されるものとしての文化という概念を訴えた。このジェイムズの文化観を、彼の小説家としての在り方と、認識に対する信念を参照しつつ考察する。

以上のように、本論文では、ジェームズが 19 世紀後半から 20 世紀初頭の世界の中での倫理的姿勢を、国籍離脱者、そしてそれに由来する不安定な主体という立場からどのように描いたかを考察した。ジェームズが示したのは、グローバリゼーションによって起きる変化を見つめ、新しい状況に対し常に新しい判断を下していく、創造的な倫理的姿勢である。本論文では、地政学的変化を背景として提示されるジェームズの新しい倫理的姿勢を明らかにし、この姿勢が認識に焦点を置く作家としての彼の在り方と強く結び付いていたことを論じた。